

外国語教育メディア学会 関西支部2017年度 春季研究大会

6/10 (土)

9:40 ~ 17:50

共催大会

近畿大学東大阪キャンパス

東大阪市小若江 3-4-1

関西英語教育学会 2017年度 (第22回) 研究大会

6/11 (日)

9:30 ~ 16:55

ワークショップ

- 学生の携帯端末を授業に活用する方法
岩居弘樹 (大阪大学)
- 英語論文を書いて国際ジャーナルに掲載させるための戦略
水本篤 (関西大学) + 斎藤一弥 (ロンドン大学)
- 「アクティブ・ラーニング」から「主体的・対話的で深い学び」へ
中井弘一 (京都橘大学)

研究発表・事例報告・Classroom Tips シンポジウム

- 明示的指導の理論と実践：発音・語彙・文法指導への可能性
齊藤一弥 (ロンドン大学) ○ 発音
中田達也 (関西大学) ○ 語彙
鈴木祐一 (神奈川大学) ○ 文法
新谷奈津子 (オークランド大学) ○ 指定討論者

シンポジウム・パネリスト

齊藤一弥先生 「聞き取りやすい発音」習得を目指して：優先的に学習すべき項目と効果的な教授法



英語が世界共通言語として使われている現状において、日本人英語学習者が、日本語訛りがあっても「聞き取りやすい発音力」の習得を目標とすべきである事は、研究者、教育者の双方において合意されることである。本発表では、過去の主要な第二言語習得研究の結果を踏まえ、日本人英語学習者はどの発音項目を優先的に学習していくべきか (what-to-teach)、そしてそうした重要な発音項目を、どの様に効果的に指導していくべきか (how-to-teach)、の2点について考察する。

ロンドン大学パークベックカレッジ 応用言語学部 専任講師。言語学博士 (Ph.D., マギル大学)。2015年より国際学術誌 TESOL Quarterly (Wiley Blackwell)、Language Teaching Research (SAGE) の編集委員を務める。研究テーマは、(1) 日本人英語学習者がグローバル社会の中で活躍するノンネイティブスピーカーとしてどのようなスピーキング能力を目指すべきかという目標設定、(2) そうした目標を達成するために、学習者のスピーキング能力を効果・効率的に向上させる教授法の開発。ウェブサイトを (http://kazuyasaito.net/)

鈴木祐一先生 SLA 研究に基づく効果的な繰り返し文法練習の原理：教室での指導とカリキュラムへの示唆



基本的な文法構造を身につける (=素早く使えるようになる) ためには、何度も繰り返し練習を行うことが必要不可欠である。本発表では、SLA 研究から、繰り返し練習を効果的にデザインするための原理を提案する。具体的には、「何を」、「どのように」、「いつ」繰り返すかという3つの観点から、SLA 研究で分かっていることを概観する。そこで得られた知見から、教室指導とカリキュラムへの示唆について考える。

神奈川大学 外国語学部 准教授。東京学芸大学教育学部日本語教育専攻卒業。東京学芸大学大学院教育学研究科英語教育学専攻修了。メリーランド大学大学院・第二言語習得研究科修了 (PhD in Second Language Acquisition)。近著に『高校生は中学英語を使いこなせるか? ~基礎定着調査で見た高校生の英語力~』(アルク, 共著) などがある。

公募ワークショップ・フォーラム ランチセッション

- 質的研究入門—実践研究に役立てるために
高木亜希子 (青山学院大学)
- 生徒が自ら学びを選択する場づくり
江藤由布 (近畿大学附属高校)

研究発表・事例報告・ポスター・デモ発表 講演

- やる気は伝染する!? ペアやグループの動機づけから考える英語指導
廣森友人 (明治大学)

中田達也先生 第二言語語彙習得を促進する方法：検索・分散効果・遅延効果を中心に



"Without grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed" (Wilkins, 1972, p. 111) という言葉に示されている通り、語彙は外国語学習者にとって最も重要な知識の1つであると考えられる。どのようにすれば第二言語における語彙習得を促進できるかは、研究者のみならず、教員・学習者にとっても大きな課題である。本発表では、検索・分散効果・遅延効果等に関する先行研究を概観した上で、外国語における語彙学習を促進するための方法について考察する。

関西大学 外国語学部 准教授。PhD (Applied Linguistics, Victoria University of Wellington)。専門は第二言語習得と CALL。Studies in Second Language Acquisition, Language Teaching Research 等のジャーナルや、Encyclopedia of Applied Linguistics (Wiley-Blackwell), Corrective Feedback in Second Language Teaching and Learning (Routledge), SLA Research and Materials Development for Language Learning (Routledge)、『理論と実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導のエッセンス』(大修館書店) 等の書籍に論文を掲載。

新谷奈津子先生 指定討論者



オークランド大学 教育学部 上級講師。2011年にオークランド大学で PhD (Language Teaching and Learning) を取得後、シンガポール南洋工科大学助教授を経て 2014 年より現職。第二言語習得におけるタスクの役割、明示的指導の効果などを中心に多数の研究論文を Language Learning, Studies in Second Language Acquisition などのトップジャーナルに発表。2016 年には単著 Input-based Tasks in Foreign Language Instruction for Young Learners を John Benjamins から出版。

外国語教育メディア学会 関西支部2017年度 春季研究大会

ワークショップ案内

●各ワークショップとも、会場の都合により、先着 50 名までとなっております。当日、受付にて整理券を配布しますので、ご希望の方は、お早めにお越しください。

岩居弘樹先生 学生の携帯端末を授業に活用する方法

タブレット端末を活用したアクティブな外国語授業の一例をご覧ください、実際に携帯端末で利用できる様々なツールを体験いただく予定です。

ICT ツールは今までの学習方法を "enhance" するような使い方だけでなく、ICT ツールを導入することで初めて実現できる学習方法もあります。みなさまと一緒にいろいろな可能性を考えたいと思います。

岩居先生プロフィール：大阪大学 全学教育推進機構 教授。携帯端末・タブレット端末や Web サービスを活用したドイツ語学習の実践研究のほか、サンフランシスコと大阪を結んだ遠隔講義、リーディング大学院の多言語リテラシー科目などを担当。「外国語の学び方を学ぶ」ことを目標にした、アクティブな外国語授業を展開している。Apple Distinguished Educator 2013。

水本篤先生+斉藤一弥先生 英語論文を書いて国際ジャーナルに掲載させるためのストラテジー

前半では、(1) 英語論文を書くときの心構え、(2) 英語論文執筆に役立つジャンル分析の基礎的概念、(3) 英語論文執筆支援ツール AWSuM (<http://langtest.jp/awsum/>) の効果的な使用方法、(4) 指導で AWSuM を利用する場合のヒント、という 4 点を紹介します。

後半では、発表者が実際に日本、イギリス、アメリカ、カナダ、シンガポールの 5 か国の研究者達と同時に行った様々な共同研究プロジェクトの過程を紹介し、日本人研究者単独では非常にハードルが高いとされる国際学術誌出版を勝ち取り、さらにどの様に量産させていくべきか具体的に考察していきます。

水本先生プロフィール：関西大学 外国語学部 外国語教育学研究科 教授。専門はコーパスの教育利用、語彙学習方略、言語テスト。主な著作・論文に、「Exploring the art of vocabulary learning strategies: A closer look at Japanese EFL university students」(2010, 金星堂)、『外国語教育研究ハンドブック』(2012, 松柏社, 共編著)、『ICTを活用した英語アカデミックライティング指導—支援ツールの開発と実践—』(2017, 金星堂, 編著)。「Applying the bundle-move connection approach to the development of an online writing support tool for research articles」(Language Learning, in press) などがある。2014 年全国英語教育学会 (JASELE) 学術奨励賞受賞。2016 年英語コーパス学会 (JAECs) 奨励賞受賞。

斉藤先生プロフィール：早稲田大学商学部専任講師 (2012-2015) を経て、現在ロンドン大学バークベックカレッジ応用言語学部専任講師。言語学博士 (Ph.D., マギル大学)。専門は第二言語習得で、関連研究は *Studies in Second Language Acquisition*, *Language Learning*, *Journal of Memory and Language*, *Bilingualism: Language and Cognition*, *TESOL Quarterly*, *Applied Psycholinguistics*, *Applied Linguistics* などの国際誌に掲載されている。2014 年度早稲田大学リサーチアワード受賞。2015 年より国際学術誌 *TESOL Quarterly* (Wiley Blackwell)、*Language Teaching Research* (SAGE) の編集委員を務める。

中井弘一先生 「アクティブ・ラーニング」から「主体的・対話的で深い学び」へ—本当に大切なことは何かを考える—

文科省は、3月末に公表した次期指導要領で、「アクティブ・ラーニングは多義的な言葉で概念が確立していない」としてその用語を使わず、「主体的・対話的で深い学び」という表現に統一し、これまでの「アクティブ・ラーニング」騒動に終止符を打ったようだ。本ワークショップでは、そうしたことを踏まえ、それでは「主体的・対話的で深い学び」には何が大切で、なぜ大切なのかを参加者と共に考えたい。

中井先生プロフィール：京都橘大学 教授。大阪府立高校3校で英語科教諭として勤務後、大阪府教育センター指導主事、府立高校教頭、大阪府教育委員会管理主事、府立高校校長を歴任、2004 年早期退職し、大阪女学院大学に赴任、本年3月定年退職。現在、京都橘大学に招かれ教授として勤務。

参加費

LET 会員・KELES 会員 (一般・学生とも) 無料・非会員一般 2,000 円、学生 1,000 円

詳しくは、各学会ウェブサイトをご覧ください

LET 関西 <http://www.let-kansai.org/>

KELES <http://www.keles.jp/>

問合せ

LET 関西事務局 山西博之 letkansai@gmail.com

KELES 事務局 大和知史 kelesoffice@gmail.com